

4. フクシアマノリ採苗試験

まえがき

日本4土ではアサダマノリの増殖が盛に行われ相当の収益を揚げているようである。琉球に産するフクシアマノリ (*Porphyra orilepeta*) もアサダマノリと同様増殖ができれば内海水面利用による生産も可能となりノリ製品輸入防遏ともなるのでこの採苗と糸状体培養について予備的試験を行うことにした。

試験方法

採苗器を杜鰓殻としト♯箱(ビニール製横40縦55高さ9釐)に海水を8分目満たし杜鰓殻の内面を上にしてその底面に敷き並べその上に原藻を浮べ胞子の着生を計り室内の直射日光の直射を避けられるところに置き1週間毎に換水を行って糸状体の状態を観察調査することにした。

経過

オ一回は波高敷村波高敷城島から原藻を採集、ビニール袋に海水を入れた中に入れて持ち帰り3月30日採集。4月2日準備しておいたト♯箱に入れ4月3日まで置いて胞子の着生をはかり原藻を取り去り以後1週間毎に換水して着生の模様を調べることにしたが硅藻類が附着してノリ胞子の着生状況不良のため4月27日撤去した。

4月24日(オ二回)那覇市市営住宅養魚場から原藻を採取ビニール袋に入れ海水を溜める程度に入れて持ち帰り直ちにト♯箱に入れて胞子付けを行い原藻は3日目に除去した。

4月27日(オ三回)5月1日(オ四回)にも引き続き前記方法により各一箱分胞子付けを行ったが4月24日以降の分は海加はずべて苗戸に脱脂綿を敷き濾過して使用することにした。5月1日観察の結果糸状体形成のものが見受けられ密を強くして5月15日更に1箱分胞子付けを行った。

5月20日観察したところオ二回分は糸状体が成育拡大数面の殆んど全面を覆い紫褐色を呈し中には更に基んで灰褐色を呈したものもある。しかし中には色素がなくなり白色斑点が生ずるものも出て来た。後で分つたのであるが此の部分はカビかその他細菌の着生により侵蝕されたものの様である。

オ三回分(4月27日実施)大部分紫褐色を呈しているのであるが未だ全面を覆う程でなく着生基部が分ち程度で数日体の白色部が残っている。

オ四回分(5月1日実施)紫褐色を呈し着生基部の判別ができななものもあるが極僅かであるが大部分は紅色を呈し径5mm位の円形斑点状である。

なお、6月中旬以降のト♯箱内水温は25°—29°を示していた。

所感

ト♯箱には杜鰓殻とともにスライド硝子を入れて胞子の附着状況観察月としたが硝子面上